組織学会通信

No.96
2025. 1. 20

【 大　会　関　係 】

【１】2025 年度組織学会年次大会報告

2024 年 9 月 28 日（土）および 29 日（日）にて、田路則子先生を実行委員長、近能善範先生を事務局長として、2025 年度組織学会年次大会が法政大学で開催されました。2022 年の武蔵大学大会、2023 年の関西大学大会に続き、今回も対面による開催となりました。大会開催すなわちオンライン開催であった頃が、はるか昔のことのように感じられるのは私たちだけでしょうか。

今回も 436 名（招待者含む）もの参加者を迎え、盛況のうちに終了することができました。田路先生、近能先生はじめ、法政大学実行委員会の先生方におかれましては、会場の予約、コンテンツの考案から当日の運営・対応に至るまで、大変きめの細かい大会準備・運営をしていただきました。心より御礼申し上げます。また、当日法政大学にご来場くださり、ご登壇された先生方にも、重ねて御礼を申し上げます。

本大会の統一テーマは、「経営のフロンティア：2040 年に向けた組織の課題と挑戦」でした。当日は、このテーマのもと、2 日間にわたり、（１）開催校主催セッション、（２）大会委員会セッション、（３）ランチョン・ミーティング、（４）特別セッション、（５）会長講演、（６）英語セッション（Special International Research Session）など、バラエティー豊かなセッションが提供されました。

（１）については、ミクロレベルからマクロレベル、心理学的テイストの強いものや社会学的なもの、理論志向の強いものやエンピリカルなものまで、実にバリエーションに富んだものでした。（２）の大会委員会セッションは、いずれも産学連携研究に関わるものでした。それぞれ照射している問題は微妙に異なるものの、いずれも、大学と企業とが「データ」という人工物を媒介として、どのように相互作用し、どのように、そしてどのような知識を紡ぎ出すことができるのか、という問題を提起したものでした。1 日目と 2 日目の昼食休憩時間には、それぞれ、（３）ランチョン・ミーティングが行われました。初日のランチョン・ミーティングには米倉誠一郎先生による「さよならイノベーション」というテーマでのお話、2 日目には、榮藤稔先生による「AI が描く産業と社

会の未来像－組織構造と意思決定プロセスの再定義と新たな倫理的課題－」というテーマでのお話が、それぞれ提供されました。控えめにいっても、とてもエキサイティングなものでした。

（4）の基調講演においては、2つの「本郷バレーのスタートアップ・エコシステム」を共通テーマとする、特別セッションⅠ・Ⅱが開催されました。特別セッションⅠでは、「東京大学における 20 年間の軌跡」というテーマで、東京大学産学協創推進本部の菅原岳人氏（ディレクター）と松井克文氏（ディレクター）の 2 名、および東京大学エッジキャピタルパートナーズ(UTEC)の坂本教晃氏（取締役 COO パートナー/マネージングディレクター）より、東京大学のアントレプレナーシップ教育およびスタートアップ支援についてのそれぞれの取り組みや経験についてお話をいただきました。特別セッションⅡでは、ロボティクス分野で最先端を行く東京大学大学院情報システム工学研究室に焦点をあてて、「先輩から後輩へ受け継がれる起業家活動－ロボティクス領域での起業実践－」というテーマにて、関係者同士の相互作用、研究者や学生・出資者の目線から見た大学やベンチャーキャピタル、TLO、国や地方公共団体等による支援・政策などについて、議論が行われました。特別セッションⅡには、長らく研究室を運営されてきた稲葉名誉教授、そして JSK 出身のスタートアップ企業の創業者である小倉崇氏、孫小軍氏でした。2 日目の午後には、（5）会長講演のセッションが行われ、青島矢一組織学会会長より、経営学の研究と学会の国際化に関わる想いと、青島会長が描くアイディアが披露されました。

今回から新たに加わることになったのが、英語でのプレゼンテーションによる（6）英語セッション（Special International Research Session）です。国際委員会と大会委員会の共同で進められ、実現したこのセッションには、予想を遥かに上回る数のエントリーがありました。普段とは異なる実に活発な議論の場となりました。英語だけで熱い議論が交わされる部屋が 1 つ加わることで、大会に、新たな彩りが加わることになりました。組織学会が、青島会長がお話になった「研究、そして学会の国際化」に向けて大きな一歩を記した瞬間だったように思います。

改めまして、充実したセッションの実現にご協力くださった全ての皆様に心より御礼申し上げます。そして繰り返しになりますが、田路先生、近能先生はじめ、法政大学の実行委員会の先生方に改めて感謝申し上げます。また、当日ご参加いただいた全ての会員様、ゲストの皆様にも、感謝申し上げます。

＊2025 年度組織学会研究発表大会（九州大学）のお知らせ

2025 年度組織学会研究発表大会は、九州大学にて開催されます。大学の施設予約の関係上、まだ日時は確定しておりませんが、現時点では対面での開催を予定しております。しばらくしますと大会日時の発表と大会報告の申し込みを開始いたします。大会報告申込を予定されている方は、執筆要綱を熟読の上、規定のフォーマットに則り原稿を作成し、チェックリストにて確認のうえ、ご応募くださいますよう、重ねてお願い申し上げます。

大会委員会担当理事　井上　達彦
大会担当評議員　服部　泰宏

2025 年度組織学会年次大会 開催校挨拶

2025 年度組織学会年次大会は、2024 年 9 月 28 日（土）と 29 日（日）に、法政大学市ヶ谷キャンパスにて開催いたしました。本大会は、会場手配の都合により 9 月末という多くの大学において学期開始直前や学期初めと重なる時期に実施せざるを得ず、加えて近年の宿泊費高騰の影響も懸念され、参加者の集客が難しいのではないかと危惧しておりました。しかしながら、結果として 436 名もの大変多くの皆様にご参加いただき、盛会のうちに終えることができました。

大会担当理事の井上達彦先生をはじめとする大会委員会の先生方、各種セッションにご登壇いただいた先生方、学会事務局の樋口様には、心より御礼申し上げます。また、貴重な大会運営のノウハウをご教示くださった関西大学の横山先生、明治大学の歌代先生、京都産業大学の具先生にも、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

本大会では、2040 年という「近すぎず遠すぎない未来」を時間軸に設定し、「経営のフロンティア: 2040 年に向けた組織の課題と挑戦」をテーマに設定しました。将来に向けて、企業・組織が現在直面する多岐にわたる課題にどのように対応しているのか、また組織論・戦略論研究がどのような視座や理論、分析を提示できるのかを、参加者の皆様と共に考え、対話する場とすることを目指しました。また、現場での実践をビビットに捉えることに重きを置いたプログラム構成にいたしました。

通常プログラムでは、開催校および大会委員会の企画として、標準化・ルール形成、企業のビッグデータ分析、ファミリービジネス、スタートアップ・エコシステム、越境学習と組織学習、DX（デジタルトランスフォーメーション）、企業家教育、人事分野の産学協同研究、“中小企業淘汰論”、ダイバーシティとインクルージョン、プラットフォームビジネスといった、2040 年に向けて日本や日本の企業・組織が克服しなければならない課題と密接に関連したテーマを扱う合計 11 個のセッションを開催いたしました。いずれのセ

ッションでも、登壇者の報告の後にパネルディスカッションが行われ、フロアも交えて“熱い”ディスカッションが繰り広げられました。また、多くのセッションで、終了後にも会場内外で議論を続ける参加者の姿が見られ、知見の共有と交流が一層深まった様子が伺えました。

1 日目の午後に開催された特別セッションのⅠ・Ⅱでは、「本郷バレーのスタートアップ・エコシステム」をサブ・テーマとして、研究大学を中核とするスタートアップ・エコシステム形成において日本で初めて「死の谷」を乗り越え、自律的な成長段階に達したと見られる本郷バレーを取り上げました。特別セッションⅠでは、東京大学産学協創推進本部ディレクターの菅原岳人氏と松井克文氏、東京大学エッジキャピタルパートナーズ(UTEC)取締役 COO パートナー/マネージングディレクターの坂本教晃氏にご登壇いただき、本郷バレー形成の 20 年間の軌跡についてお話いただきました。特別セッションⅡでは、東京大学大学院情報理工学系研究科創造情報学専攻 名誉教授の稲葉雅幸氏、その教え子で、株式会社シンクロボ 代表取締役社長の小倉崇氏と、BionicM 株式会社 代表取締役社長の孫小軍氏にご登壇いただき、ロボティクス分野で数多くのアカデミック・スピンオフを輩出してきた東京大学大学院 情報システム工学研究室(JSK)での取り組みと、JSK を母体とした 2 つのスタートアップ企業の軌跡についてお話しいただきました。2 つのセッションとも非常に興味深い内容で、パネルディスカッションではフロアを交えて大変活発なディスカッションが行われました。

また、1 日目と 2 日目の昼食休憩時間には、ランチョン・セッションを開催いたしました。まず、1 日目のランチョン・セッションでは、一橋大学 名誉教授、デジタルハリウッド大学大学院 特命教授の米倉誠一郎先生にご登壇いただき、「さよならイノベーション」とのテーマで、熱気溢れるご講演を賜りました。2 日目のランチョン・セッションでは、DOCOMO Innovations Inc.及び DOCOMO Capital Inc.の元社長、㈱NTT ドコモの元執行役員、㈱NTT ドコモベンチャーズの元社長で、現在は大阪大学先導的学際研究機構 教授と、科学技術振興機構（CRES）戦略的創造研究推進事業 人工知能領域 研究総括を兼務されている栄藤稔先生にご登壇いただき、「AI が描く産業と社会の未来像－組織構造と意思決定プロセスの再定義と新たな倫理的課題－」とのテーマで、極めて示唆に富むご講演を賜りました。いずれのセッションも、本学最大規模の教室がほぼ満席となり、参加者の皆さんが一言も逃すまいと熱心に聴講されている姿が大変印象的でした。

さらに本大会では、初めて国際委員会主宰の英語セッション（call for papers 方式）が実施さ、大成功をおさめました。1 日目は 2 セッション並行で 6 セッション・18 報告を実施、2 日目は 3 セッション並行で 9 セッション・27 報告を実施、2 日間で計 15 セッション・45 本もの報告が行われました。国際委員会が報告者の審査・選定、プログラムの編成、来日研究者のビザ発行の手配、司会者の手配、受付等担当学生の手配等の全ての作

業を担っていたのですが、学会長の青島矢一先生と国際委員会担当理事の山田仁一郎先生の強いリーダーシップ、国際委員会幹事の吉岡(小林)先生および後藤先生、そして委員会の先生方、司会を担当いただいた先生方の献身的なお仕事ぶりに、大変感銘を受けました。事前の予想を遙かに超える反響があり、どの時間帯でもトータル 100 名以上の会員が英語セッションに参加し、報告後の質疑応答の時間には非常に活発なディスカッションが行われていました。国際委員会の先生方は本当にご苦労されたことと思いますが、ぜひ来年度以降の年次大会でも、本企画を引き続き実施していただきたいと願っております。

それから、大会前日の 9 月 27 日(金)には、ドクトラル・コンソーシアムが開催されました。この場では、丸々1 日かけて、選抜された 5 名の博士課程学生による研究発表に対し、宮尾学先生をはじめとする 3 名の経験豊かな先生方から丁寧なコメントが寄せられ、濃密な議論が展開されました。若手研究者の学びと成長を支えるこの取り組みが、一層充実した内容となったことを大変喜ばしく思います。

加えて、1 日目の夜には懇親会が開催され、198 名もの参加者が一堂に会しました。会は大いに盛り上がり、多様な交流が活発に行われ、研究者同士の絆を深める有意義なひとときとなりました。

本大会の裏テーマは、「義理を果たす」でした。われわれ開催校実行委員一同、歴代の大会委員長の先生方から大会開催の依頼を受けるたびに、教室不足と人員不足を理由にお断りせざるを得ず、長年にわたり大変心苦しい思いを抱えておりました。しかし、10 年以上に及ぶ本学キャンパスでの建替え・改修工事が 2021 年に完了したことを機に、「ここで義理を果たそう」と決意し、開催校をお引き受けいたしました。

1995 年以来 29 年ぶりの組織学会大会開催でノウハウが乏しく、準備も遅れがちで、関係者の皆様にご迷惑をおかけする場面もあったかと思います。ただ、総じて大きなトラブル無く大会を終えることができ、開催校としての責任と義理は果たせたものと考えております。これもひとえに皆様のお力添えの賜物と、深く感謝いたします。

改めまして、2024 年度組織学会年次大会が盛会に終わりましたことをここに報告し、開催にご協力いただきました全ての皆様、登壇者の皆様、参加者の皆様に再度、心より御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

2025 年度組織学会年次大会 実行委員長　田路　則子

事務局長　近能　善範

実行委員会一同

2025 年度ドクトラル・コンソーシアム報告

ドクトラル・コンソーシアムは、次世代の組織論研究を担う若手研究者育成を目指して2001 年度から行われてきたものです。今年度は年次大会に先立ち、9 月 27 日（金）に開催されました。今年度は開催校の法政大学が提供して下さった会場で開催することができました。参加メンバーと内容は以下の通りです　(敬称略)。

	氏　名	所　属
オーガナイザー	宮尾　学 山野井　順一 佐藤　秀典	神戸大学大学院 経営学研究科 教授 早稲田大学 商学学術院 商学部 准教授 筑波大学ビジネスサイエンス系 准教授
参加者	市　悠太郎 工藤（原）由佳 陳　青 永野　克将 米田　晃	一橋大学大学院　経営管理研究科　博士後期課程 早稲田大学大学院　商学研究科　博士後期課程 神戸大学大学院　経営学研究科　博士課程後期課程 一橋大学大学院　経営管理研究科 博士後期課程 神戸大学大学院　経営学研究科　博士課程後期課程

今年度のドクトラル・コンソーシアムも、例年通り、午前・昼・午後の 3 つのセッションに分けて実施しました。午前のセッションでは、全員で簡単な自己紹介を行った後、ペーパー・ディベロップメント・ワークショップ（PDW）を 2 つ行いました。PDW では、大学院生が自らの論文の内容を 15 分程度で報告した後に、事前に割り当てられた他の大学院生 1 名が 5 分程度でコメントし、論文の良い点と改善の可能性を報告し、全員で共有しました。続いて、事前に割り当てられた担当オーガナイザーが 8 分程度でコメントをし、残りの時間で全員参加のディスカッションを行いました。昼のセッションでは、オーガナイザー3 名が、若手の研究者に取り組んで欲しいことをテーマに設定してそれぞれ 15 分程度のレクチャーを行い、参加者と意見交換しました。午後のセッションでは、残り 3 つの PDW を行い、最後に全体の感想を共有して、お開きとしました。

タイムテーブル

【セッション 1】

10:40～10:50　オーガナイザーと参加者による、簡単な自己紹介（10 分）

10:50～11:40　①　陳青さん（50 分）＜コメント: 山野井先生、市さん＞

休憩（10 分）

11:50～12:40　②　工藤（原）由佳さん（50 分）＜コメント: 宮尾先生、米田さん＞

休憩（10 分）

【ランチョン・ミーティング 兼 昼食】

12:50～13:05　宮尾先生発表　（15 分）
13:05～13:20　山野井先生発表　（15 分）
13:20～13:35　佐藤先生発表　（15 分）
13:35～13:50　意見交換・懇談　（15 分）
休憩　（10 分）

【セッション 2】
14:00～14:50　③　市悠太郎さん（50 分）＜コメント: 宮尾先生、工藤さん＞
休憩（10 分）
15:00～15:50　④　永野克将さん（50 分）＜コメント: 山野井先生、陳さん＞
休憩（10 分）
16:00～16:50　⑤　米田晃さん（50 分）＜コメント: 佐藤先生、永野さん＞
休憩（10 分）

16:50～17:00　クロージングリマークス（10 分）

【懇親会】
17:30～19:30　飯田橋スペインバル ALBA

それぞれのテーマは、ジョブ・クリープ（陳さん）、制度的企業家による市場創造（工藤さん）、取引形態とメーカーの競争力（市さん）、技術の普及における教育機関の役割（長野さん）、人的資本経営（米田さん）と多様で、研究の方法も文献研究、成功要因、ディスコース分析など多様なアプローチが揃いました。全員が、10:40 のスタートから 17:00 の終了まですべてのセッションに参加し、活発な議論を展開しました。

以上の PDW の主たる目的は、「現在の原稿を学術誌（『組織科学』）に掲載されるレベルにまで高めるにはどうしたらよいか」に置かれました。大学院生は、自らの論文に対するオーガナイザーや他の大学院生からの質問やコメントを聞いて学ぶだけでなく、他の大学院生の論文に対するコメンテーターの役も経験しました。他の論文にコメントをすることで査読者としての視点を体験し、より幅広い視野から自分の論文や研究を捉える経験を積むためです。テーマやトピック、方法論も異なる研究にコメントすることを通じて、さまざまな角度から研究の内容を吟味する視点を学ぶことができたと思います。さらに、今回の参加大学院生は学部から進学した日本人大学院生だけではなく、社会人大学院生や海外出身大学院生など様々なバックグラウンドの参加者がおりましたので、多様な視点に立って研究のことを考える機会になったというのも良かったと思います。

ランチョン・ミーティングでは、3 名のオーガナイザーがこれまでの研究活動を振り返り、研究の進め方や論文の書き方、査読プロセスのくぐり方、あるいは研究者としてのキャリアの築き方など、様々なことを話しました。大学院生の皆さんが今まさに悩んでいることは、オーガナイザー自身もかつて苦労したことです。だからこそ、それらの問題にどのように考えたのか、そして対処したのか、具体的な体験にもとづいてお話ししました。オーガナイザーがかつて学会で受けた指導を次の世代に送るという意味でも、とても有意義な時間だったと思います。

コンソーシアム終了後、参加者で飯田橋スペインバル ALBA での懇親会になだれこみました。コンソーシアムでの雰囲気をそのままに論文や研究について話すだけでなく、研究者としての生活など普段はなかなか話せないことを話すことができました。

コロナ禍を経て、対面開催ができるようになったドクトラル・コンソーシアムは、昨年と同様、非常に有意義な機会になったと思います。さまざまな調整をして下さった組織学会大会委員先生方ならびに執行部の諸先生方と、開催校の諸先生方、前年度総合オーガナイザーであった生稲先生とその他関係者の皆様方に、心より御礼を申し上げます。

ドクトラル・コンソーシアムに招待されることは大学院生にとって名誉なことであり、またこの会で得られた同世代の若手研究者とのネットワークは貴重な財産となります。われわれ経営学研究者の多くは、所属大学が違っても、組織学会を含む学界に育てられたという思いを持つ人が多くいます。若手研究者のみなさんもこの会を通じて築かれた友情が、今後の研究生活において続くことを願っています。そして、ドクトラル・コンソーシアムでの議論を活かし、一人でも多くの大学院生の皆さんの論文が『組織科学』に掲載できることを心から願っております。

2025 年度担当オーガナイザー　宮尾　学、山野井　順一、佐藤　秀典

【２】2025 年度組織学会研究発表大会のお知らせと公募要領

2025 年度組織学会研究発表大会は、2025 年度 6 月後半の週末（日程は 2025 年 1 月中に確定予定）に、九州大学を開催校として開催いたします。会場は、2018 年 9 月に移転が完了した九州大学伊都キャンパス（福岡市西区）を予定しています。九州大学での開催は、2008 年度年次大会以来となります。

研究発表大会は、院生セッションならびに研究発表セッションを中心とした自由論題による発表となります。下記の通り報告公募のご案内を致しますので、どうぞ奮って研究発表にご応募いただきますようお願い申し上げます。

参加者の皆様にご満足いただけるような研究発表大会となるよう、実行委員会一同、鋭意努力して参ります。どうぞご理解とご協力の程、よろしくお願い申し上げます。

1. スケジュール

2025 年 1 月 24 日（金）～3 月 28 日（金）	演題登録・報告完成原稿受付期間
2025 年 1 月 24 日（金）～6 月上旬（未定）	事前参加申込受付期間
2025 年 4 月中旬以降	大会報告審査結果通知
2025 年 5 月上旬以降	大会プログラムの公開

2. 演題登録と報告完成原稿の提出

組織学会 Web サイトからリンクをたどっていただき、2025 年度組織学会研究発表大会専用ウェブサイト(Confit)にログインし(要会員番号。組織学会から郵送される封筒の宛名ラベル右下に会員番号の記載がありますので、ご参照ください)、演題、キーワードを登録してください。キーワードは、セッション編成時の基準となりますため、以下の中からご自身の研究にあてはまるものを選んでください。

【方法論】定量分析、定性分析、歴史研究、理論研究、文献レビュー（1 つ選択）

【分野】ミクロ組織、マクロ組織、人的資源管理、経営戦略、国際経営、マーケティング、技術・生産管理、イノベーション、企業家、経済学、法学、行政学、社会学、心理学、工学(2 つまで選択)

事前参加登録および演題登録をした上で、Confit の原稿提出画面より報告完成原稿を提出してください。締切日（3 月 28 日）以降、登録情報（タイトル名、報告者名、複数で発表する場合は名前の順番、等）の変更は一切認められません。変更の場合、報告をご辞退いただくことになります。

※なお、報告応募をされる場合には、事前参加申込を行わないと先に進めませんので、ご注意ください。

報告完成原稿は、『AAOS Transactions』掲載希望の有無に関わらず、執筆要綱に基づき、指定のテンプレートを用いて作成された原稿を受け付けます。提出前にはチェックリストを参照し、要件をすべて満たしているかをご確認ください。これまでの大会でも、テンプレート不使用、ページ数超過、行数字数やフォントサイズの変更、キーワード不在などがみられました。執筆要綱に則っていない原稿は、リジェクトされることがあります。

なお、『AAOS Transactions』に登載された論文は、公表論文として取り扱われます。他の学会報告や論文集の掲載等の二重投稿には十分ご留意ください。『AAOS Transactions』への掲載を希望する場合は大会報告後に改めて確認をいたしますので、ご回答ください。

3. セッションの種類とそれぞれの申込資格

演題登録時に、次のどちらかを選択していただくことになります。

(1)研究発表セッション：組織学会正会員（会費滞納者は不可）による自由論題の研究報告で、セッションは発表 25 分と質疑応答 15 分となります。

(2)大学院生セッション：組織学会正会員（会費滞納者は不可）の大学院生（報告時に正規の大学院生として在籍していること）による自由論題の単独での研究報告です。セッションは報告 15 分、質疑応答 10 分、総計 25 分です。報告者の中から、大会委員会で選ばれた方を秋の年次大会時に開催するドクトラル・コンソーシアムにご招待申し上げます。

4. 採否の決定

複数の査読者が完成原稿を査読し、採否を決定し、2025 年 4 月中旬までに、筆頭報告者(ファースト・オーサー)に審査結果を電子メールにて通知します。

特に、参考文献リスト（References）の完全性は掲載の必須要件となっておりますので、投稿者の責任において細心の注意を払ってご作成ください。

2025 年度組織学会研究発表大会　実行委員会

【３】ドクトラル・コンソーシアムについて

研究発表大会の大学院生セッションで報告した方の中から、大会委員会が選んだ大学院生を、その年の秋の年次大会時に開催する「ドクトラル・コンソーシアム」（ドクコン）にご招待いたします。大会委員会の選考基準は「組織科学に投稿して採択されるような論文になることが期待される報告」です。大会委員会で選ばれた方には、研究発表大会終了直後に「インビテーション・レター」をお送りいたします。ドクトラル・コンソーシアムはその年の年次大会前日にほぼ丸一日かけて開催されますので、ドクトラル・コンソーシアムご参加の意思確認をいたします。ドクトラル・コンソーシアム参加者の当該年次大会の参加費は免除します。

ドクトラル・コンソーシアムは、いわゆる Paper Development Session です。ドクトラル・コンソーシアム参加者は、全員が『組織科学』仕様の（投稿規定に則った）論文を持ち寄り、オーガナイザーの指導の下、互いに切磋琢磨することを求められます。ドクトラル・コンソーシアム提出論文は、「組織学会ドクトラル・コンソーシアム査読付報告論文」と明記できるようになりますが、それに満足することなく、ドクトラル・コンソーシアム終了後できるだけ速やかに修正し、『組織科学』等に投稿されることを強く希望いたします。ま

たドクコン参加者については、「組織学会〇〇年度研究発表大会（大学院生セッション）優秀報告者」という呼称を用いることになっております。

そして、ドクトラル・コンソーシアム開催日あるいは大会開催期間中のいずれかの夜は、ドクトラル・コンソーシアム参加者による懇親会も開かれます。くつろいだ雰囲気の中で、先輩研究者とのカジュアルな対話を通して、良い研究とはどのようなものか、研究を行う上での手がかりや悩み、研究者としてのあり方などを考える贅沢な時間をお楽しみください。

ドクトラル・コンソーシアムに関心を持たれた大学院生の会員は、まずは研究発表大会での大学院生セッションでの報告に奮ってご応募ください。それがドクトラル・コンソーシアム「インビテーション・レター」への最初の一歩となります。

大会委員会

【４】2026 年度組織学会年次大会のご案内と開催校挨拶

2026 年度組織学会年次大会は、2025 年 9 月 20 日及び 21 日、青山学院大学（青山キャンパス）にて開催する予定です。現時点では教室利用の予約が確定していないため、日程変更となる可能性も残っていますが、確定次第メーリングリストや組織学会 web ページなどでお知らせいたします。

この大会の統一テーマは『VUCA の時代と組織の可能性－時間、空間とモード』とさせていただきました。詳細は後述しますが、英語論文の研究発表や、さまざまなセッションの学術的なトピック及び研究分野の境界を限定的に求めるのではなく、大会全体の課題意識として、ご参加いただく皆様にお考えいただきたい方向性を主催校から提案させていただきました。大会プログラムの内容は多岐にわたり、開催校提案のセッションに加え、大会委員会がオーガナイズするセッション、そして、組織学会国際委員会による英語での国際セッションなども計画されており、広義の組織・戦略研究全般の発表とディスカッションの場となります。また、研究発表に加え、実務家の講演、パネル・ディスカッション、ドクトラル・コンソーシアムなど、多様なフォーマットで開催されます。特別講演には研究者や実務家によるキー・ノート・スピーチなども計画しています。

大会テーマは、課題として、組織論分野において 100 年以上にわたり積み上げられてきた諸理論、概念あるいはパラダイムが、デジタル化や国際化が進む現代において、どのように応用可能なのかを検討することです。VUCA（volatility, uncertainty, complexity, ambiguity）に象徴される現代の市場では、生産者あるいはサービス提供者が、対面・オンライン・VR などマルチポイントで顧客との関係を築き、ストリーミングで入手可能となった顧客情報に、俊敏かつ柔軟に対応できる、アジャイルな組織を指向し、また、リニアからサーキュラーなエコノミーへの変化が求められる中、AI などの複雑化するテクノ

ロジーを機動的に応用し、戦略的に向き合う必要があります。企業経営の面では、不確定な将来に備えるには、戦略や組織に、多義的な曖昧さと分権的な多様性が生み出すイノベーションへの指向も重要になります。VUCA 時代を生きる若い経営者、マネジャーや起業家の多くは、20 世紀の組織論の知の積み上げを軽んじているようにも見えます。アナログ時代に蓄積された組織論の知見や英知は、デジタル化が進み、リモートワークやコワーキング・スペースで働くことが当たり前になったコロナ後の世界で、どのように組み替えられ、再構成され、新たな理論化と実証への可能性を提示できるのでしょうか。

ウエーバーの官僚制、ホーソン実験とインフォーマル・グループ、ウィリアムソンのヒエラルキーと市場、グラノベターの埋め込み、制度論の流れ、プラットフォーム、クラスターなど、組織をめぐるさまざまなパラダイムの変遷は、VUCA の時代にどのようなマネジメントの可能性を提供するのか。組織行動、モチベーション、リーダーシップ、コミュニケーション、イノベーション、アントレプレナーシップ、ガバナンス、人事管理など、マクロからマイクロまで、さまざまなレベルから現代の組織を考えていくことができます。アプローチの方法として、第 1 には、「時間」（moments）から見た組織・戦略の可能性であり、時系列モデルやサバイバル・アナリシス、組織のコミュニケーションが成立する瞬間を描くエスノグラフィー、テクノロジーや文化の制度化プロセス、ネットワークの変化、フィクションとしての未来への期待、performativity など様々な応用が考えられます。第 2 には、「空間」（spaces）と組織として捉えることが可能であり、エコシステム、地域創生、親会社と子会社、国を超える取引、オフィス内の空間、リモート空間、VR、仮想通貨やブロックチェーンの空間などでも組織は成立する可能性を持っています。最後に、これら時間や空間の問題は、対面のアナログからデジタル空間へ、組織の次元あるいはモード（modes）を飛び越える際に、過去、現在、将来という時間軸を超える普遍性が存在するのか。さまざまな理論化と実証の積み上げの可能性が考えられる中で、どのようにアナログとデジタルのモードを組み合わせ、生成 AI や IOT のテクノロジーを駆使し、戦略的な組織マネジメントを再構成していくことができるのか。本大会では、多様なサブテーマを設定し、さまざまなセッションを準備したいと考えています。プログラムの具体的な内容に関しては今後も追ってお知らせいたします。

青山学院大学（青山キャンパス）は、色々な文化の発信拠点である、東京の青山という好立地にあります。多くのスタートアップ、ICT の集積と若者文化のトレンドを発信する渋谷、六本木、虎ノ門に近く、トップ・エンドのファッション・ブランドが並ぶ表参道とその周辺、ティーンのストリート・ファッションの原宿、多様な分野のクリエイターが集まる代官山・恵比寿などに近く、ビジネスのダイナミズムと躍動感の一端を感じ取ることができる場所です。アクセスは、東京駅からも比較的近く、最寄り駅は JR・東京メトロ・地下鉄・バスなどのターミナル駅である渋谷や、多くの地下鉄や在来線が乗り入れる

表参道から徒歩１０分程度です。遠方からお越しいただく場合には、渋谷への高速バスなどの利用も可能かと思います。

今回は、大会委員会や国際委員会など多くの学会員の皆様にお世話になりながら、青山学院大学経営学部と専門職大学院国際マネジメント研究科（青山ビジネススクール）の有志が協力し、主催校として皆様をお迎えする準備を進めています。東京のトレンディーな動きを肌感覚で感じられるキャンパスで皆様をお迎えできることを、一同楽しみにしています。多くの会員の皆様のご参加を心よりお待ち申し上げております。

2026 年度組織学会年次大会
実行委員長　中野　勉
事務局長　山下　勝

【 2024 年度（第 20 期）決算報告 】

2024 年 11 月 15 日開催の組織学会会員総会（オンライン開催：Zoom ウェビナー）において、2024 年度（第 20 期）の決算報告が承認されました。

第20期　特定非営利活動に係る事業会計

活　動　計　算　書

自　令和 5年　9月　1日　～　至　令和 6年　8月　31日

特定非営利活動法人　組織学会

（単位：円）

科　　目	金　　額		
Ⅰ　経常収益			
1　受取会費			
個人会員　受取会費	23,584,000		
団体会員　受取会費	600,000	24,184,000	
2　事業収益			
定例研究会参加費	478,000		
年次大会参加費	2,373,000		
研究発表大会参加費	3,416,000	6,267,000	
3　その他収益			
雑収入	30,000		
受取利息	546	30,546	
経常収益　計			30,481,546
Ⅱ　経常費用			
1　事業費			
（1）人件費			
給料手当	2,870,602		
法定福利費	383,579		
人件費計	3,254,181		
（2）その他経費			
大会委員会費	7,508,160		
組織科学編集委員会費	9,771,570		
学会賞委員会費	222,525		
企画･定例会委員会費	906,525		
支部研究費	32,352		
総務委員会費	3,410,747		
広報委員会費	190,520		
国際委員会費	334,464		
その他経費計	22,376,863		
事業費　計		25,631,044	
2　管理費			
（1）人件費			
給料手当	2,870,601		
法定福利費	383,578		
人件費計	3,254,179		
（2）その他経費			
振込手数料	26,510		
什器備品費	0		
ソフトウェア利用費	165,905		
支払家賃費	1,799,808		
会計顧問料	209,000		
法人登記手数料	551,332		
その他経費計	2,752,555		
管理費　計		6,006,734	
経常費用　計			31,637,778
当期経常増減額			△ 1,156,232
Ⅲ　経常外収益			
経常外収益　計	483	483	483
Ⅳ　経常外費用			
経常外費用　計	2,970	2,970	2,970
当期正味財産増減額			△ 1,158,719
前期繰越正味財産額			74,658,529
次期繰越正味財産額			73,499,810

【 2024 年度(第 20 期)予算 】

2024 年 11 月 15 日開催の組織学会会員総会（オンライン開催：Zoom ウェビナー）において、2025 年度（第 21 期）の予算が承認されました。

― 第21期　予算書 ―

自 2024年9月 1日
至 2025年8月31日

（単位: 円）

科　　目	予算額	備考
Ⅰ　収　入　の　部		
1 会員会費収入		
個人会員分	24,000,000	
団体会員分	820,000	
2 定例研究会参加費	400,000	
3 研究発表大会・年次大会参加費	4,250,000	
4 雑収入	100,000	
当期収入合計(A)	29,570,000	
期首収支差額(前期繰り越し金)	43,109,348	
収入合計(B)	72,679,348	
Ⅱ　支　出　の　部		
1 事業費	28,065,000	
大会委員会費	5,975,000	
組織科学編集委員会費	14,550,000	
学会賞委員会費(高宮賞)	450,000	
企画・定例委員会費	650,000	
支部研究費	240,000	
総務委員会費	4,150,000	
広報委員会	850,000	
国際委員会	1,200,000	
2 管理費	10,980,000	
給与手当	7,000,000	
臨時給与	30,000	
法定福利費	1,200,000	
振込手数料	40,000	
什器備品費	250,000	
ソフトウェア利用費	200,000	
支払家賃	1,850,000	
会計事務所顧問料	210,000	
社会保険労務士手数料	200,000	
3 予備費	50,000	
当期支出合計(C)	39,095,000	
当期収支差額(A)-(C)	△ 9,525,000	
次期繰越収支差額(B)-(C)	33,584,348	

【 総 務 関 係 】

【１】 加護野忠男元会長の訃報について

組織学会元会長の加護野忠男先生（神戸大学名誉教授・特命教授）が、2024年12月28日に、逝去されました。加護野先生は組織研究の第一人者として、研究活動と学会運営の両面で、組織学会の発展に多大な貢献をいただきました。

生前のご功績を偲び、謹んでお悔やみ申し上げます。

【２】年会費納入のお願い

既にご案内のとおり、2024年9月1日より2025年度（第21期）に入っております。つきましては、お早めに年会費のご納入をお願いいたします。

1. 口座振替（自動引落）の方

2024年9月27日にご指定の口座から振替いたしました。何らかの理由で振替できなかった場合には、事務局よりご連絡を差し上げております。

2. クレジットカード決済開始について

昨年度分より、年会費のクレジットカード決済を開始いたしました。
「会員管理情報システム（SMOOSY）」のマイページよりお支払い手続きが可能となります。

その他、ゆうちょ銀行でのお支払いをご希望の方には、昨年度より「払込取扱票」をお送りしておりませんので、各自窓口にてお手続きください。

※一部会員には滞納や支払遅延がみられ、予算執行上の扱いや決算時の未払い処理等で運営上の問題が発生しております。会員の皆様には、くれぐれもお忘れなく会費をお支払いくださいますよう、よろしくお願いいたします。

【３】会員管理情報システム（SMOOSY） 登録情報内容確認のお願い

当学会では、昨年度より、会員情報管理システム「SMOOSY」を導入いたしました。会員マイページより、ご自身の登録情報（所属・住所など）の閲覧・変更、会費納付状況の照会、会費支払方法の変更が可能になっております。

これまで紙媒体で発行していた会費の請求書・領収書についても、SMOOSY の会員マイページから PDF ファイルをダウンロードしていただけます。

まだ SMOOSY にログインされていない場合、この機会にご確認いただけますと幸いです。

会員マイページへのログイン方法は以下の通りです。

【会員マイページ　ログイン方法】

(1) 会員マイページの[初めてログインする方はこちら]をクリックし、会員情報として登録しているメールアドレス（ログイン ID）を入力して[送信]ボタンをクリックします。

会員マイページ：
https://aaos.smoosy.atlas.jp/mypage/login

(2) 「パスワード設定 URL のお知らせ」メールが届きましたら、メール文内のパスワード設定 URL をクリックします。

(3) パスワードを入力して[登録]ボタンをクリックします。

(4) [会員マイページ]ボタンをクリックすると会員マイページを表示します。

(5) 画面一番下の[会員情報を変更する]ボタンをクリックし、ご自身の情報を確認・更新してください。

※操作方法が不明な場合は会員マイページ画面右上の[ヘルプ]をご参照ください。
※ログイン ID が分からない場合は、学会事務局までご連絡ください。

【2025 年度 若手学会員を対象とする研究支援について】

組織学会では、組織研究を活性化するために、若手学会員の英文論文の執筆・発表や共同研究等を奨励・促進する研究支援を、下記の通り実施します。

A)　英文論文の校正支援（1 件当たり 5 万円）

（1） 支援内容

① 組織科学英文年報や国際ジャーナルに英文論文を投稿する論文、国際コンファレンスや海外の学会で発表するフルペーパー（アブストラクトのみの

場合は支援対象外)の英文校正費用を対象として、1 件当たり 5 万円を研究奨励金として組織学会より補助します。

（2）応募条件

① 応募締切時において 40 歳未満の正会員が第一著者であることが必要です。

② 再応募も可能ですが、一度支援を受けた場合には、最低 2 年間は再応募できないものとします。

（3）応募手続

① 応募者の連絡先や投稿先などを、規定のフォーマット(組織学会ホームページに掲載)により申請してください。

② すでに投稿済みの場合には、受理レター(プリントアウト・コピー等でも可)を添付してください。

③ 締切は年 3 回（12 月・3 月・6 月）設けます。2025 年度は、2024 年 12 月 6 日（金)、2025 年 3 月 7 日（金)、6 月 6 日（金）を期日とします。
締切後の 1 ヵ月後を目途にお知らせいたします。

④ 組織学会事務局宛に、必要書類を添付ファイルとして電子メールで送付してください。受付は締切日の 17 時までとします。

（4）支援決定後の手続等

① 支援決定後に投稿する場合は、研究奨励費受領から 1 年以内に投稿することが望まれます。投稿後は、受理レター（プリントアウト・コピー等でも可）を組織学会に提出してください。

② 学術ジャーナル・学会予稿集などに採択され、掲載が決定した場合には、掲載論文に組織学会より補助を受けている旨を明記し、抜き刷り（電子ファイルもしくはハードコピー3 部)を組織学会事務局に提出してください。

B) 若手会員を中心とする共同研究(1 件当たり 10 万円)

（1）支援内容

① 代表者およびメンバーの半数以上が、応募締切時点で 40 歳未満の正会員である共同研究を対象として、1 件当たり 10 万円を研究奨励金として組織学会より補助します。

（2）応募条件

① 共同研究のメンバー全員が正会員で、代表者およびメンバーの半数以上が応募締切時点で 40 歳未満であることが必要です。

② メンバーの所属先は、複数の機関であることが望まれます。

③ 継続申請も可能ですが、原則として最長 2 年までとします。

（3）応募手続

④　参加メンバー氏名、研究テーマおよび内容等を、規定のフォーマット（組織学会ホームページに掲載）により申請してください。

⑤　締切は年 1 回（3 月）設けます。2025 年度は、2025 年 3 月 14 日（金）を期日とします。

⑥　組織学会事務局宛に、必要書類を添付ファイルとして電子メールで送付してください。

（4）支援決定後の手続等

⑦　研究グループは自らの責任において活動し、研究奨励費受領から 1 年以内に研究成果報告書を、組織学会事務局宛に提出してください。研究成果報告書は、組織学会ホームページで公開します。

⑧　研究成果については、研究発表大会・年次大会などで発表することが望まれます。他学会等で研究成果を発表する際には、組織学会からの補助を受けている旨を明示してください。論文などとして学術誌等に掲載が決定した場合には、組織学会より補助を受けている旨を明記し、抜き刷り（電子ファイルもしくはハードコピー3 部）を組織学会事務局に提出してください。

組織学会通信 第９６号
2025 年 1 月 20 日
発　　行　　特定非営利活動法人 組織学会
事務局
〒100-0005　東京都千代田区丸の内 2-5-2
三菱ビル 地下 1F　171 区外
TEL：03－5220－2896
FAX：03－5220－2968
URL：https://www.aaos.or.jp